アルバム『HIVULA』に描かれる、どこかの国のたしかな音楽

安田芙充央×滝千春×藤原亜美

編集部（構成）　写真：夛留見 彩

作曲家・ピアニストの安田芙充央さんと藤原亜美さんの2台ピアノと、『Schnittke Clowns』の衝撃も新しい滝 千春さんのヴァイオリンの邂逅が、ついにパッケージとなった。昨年末にレコーディングが行なわれたその名も『HIVULA（ヒブラ）』。リリースを間近に控えた某日、本誌試聴室に現れた三人が、音に込めた思いを語る。

滝　安田さんに聞きたかったんですよ。作品名の『HIVULA』って、何か由来があるんですか？

安田　タイトル自体は、実は40年前から温めていたものなんですよ。その頃「自由劇場」という劇団の音楽に関わっていて、劇団メンバーの吉田日出子さんや串田和美さんとある時一緒にお茶してまして。そこで僕が「曲を書きたいと思ってて、何かいいタイトルないですか」って切り出したら、20秒くらい考えた串田さんが「ヒブラっていうのはどう？」って言ったんですよ。「いいですねそれ。いただきます」って応えたっきり曲は書かなかったんですが（笑）、語感もいいし40年間心に引っかかっていて、ついにここで使ったんです。つまり完全な造語ですね。

滝　それで、2台ピアノにヴァイオリンって編成に私はまた驚いて。そんな編成そもそも聞いたことがなかったし、それが可能かすらまったく想像できませんでした。

安田　〝濃いい作品〟にしたくて、なら滝さんだな…とは早い段階で思ってました。全編ピアノ・デュオでやろうか、ヴァイオリン・ソロもいいなとか考えたんですが、ずっと2台ピアノへの個人的興味があって、今回突き詰めてみようと思いましてね。2台ピアノって音楽的に、1台では不可能なことができる。たとえば一方のピアノが音を延ばしてもう一方は同じ音をスタッカートで重ねるとか、一方は音を響かないように弦を押さえてもう一方のピアノの反響音だけ響かせるとか。一方のピアノに枠をしっかり作ってもらえばそのなかで僕が即興演奏をしたり、曲の中で〝点在〟したりとか。そのために超絶的に上手なピアニストを探して、フルーティストの萩原貴子さんから藤原さんをご紹介いただいたわけです。

藤原　安田さんとは初共演でしたけど、



HIVULA

〈演奏〉安田芙充央（Pf）、滝千春（Vn）、藤原亜美（Pf）

［CD］Pourquoi Label　POUR-1015
¥3,500／11月27日発売
●全15曲（うちボーナストラック1曲：「Sky Lament」榎本憲男監督映画『それって幸せ？』エンディングテーマ）
●合計収録時間：73分04秒

※2027年1月22日より、「Apple Music Classical」（192kHz/24bitロスレス）含む各ストリーミングサービスにて、デジタル配信開始を予定



昨年末にかながわアートホールで行なわれたレコーディングの様子（写真：編集部）。ステージ中央に2台のピアノを並べてセットし、安田さんの左後方に滝さんのヴァイオリンが位置する。なお今回の作品は「Chapter 1」と「Chapter 2」に内容を分け、「1」がトリオ編成による6曲とヴァイオリンソロ1曲、「2」がヴァイオリンと安田さんのピアノのデュオによる8曲という構成となっている



作曲家・ピアニストの安田芙充央さん。国際的な活動歴を持つ独立系作曲家として、作品はバーゼル室内管弦楽団やシュトゥットガルト室内管弦楽団など、欧州の主要なオーケストラによって演奏されている。独「WINTER & WINTER」レーベルより2000年『花曲』で欧州デビュー。ミュンヘン・オペラ・フェスティバル委嘱作をはじめ、クラシックとジャズを超越した音楽は「現代でもっとも個性的」（独Kieler Nachrichten紙）と称賛される。14年にはウィーン楽友協会大ホールにてウィーン・トーンキュンストラー管弦楽団と共演。ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門出品作の映画音楽も手がける



ピアニストの藤原亜美さん。東京藝術大学ならびにパリ国立高等音楽院を首席で卒業。1998年第3回オルレアン20世紀音楽国際ピアノコンクールにおいて第1位を受賞する。アンサンブル・アンテールコンタンポランのアカデミーに参加。また東京シンフォニエッタのピアノ奏者として2024年杭州現代音楽祭（中国）出演。第49回、51回「レコード・アカデミー賞」（現代音楽部門）受賞。現在は東京を拠点に活動中。数多くの日本初演に携わる傍ら東京藝術大学、東京音楽大学、日本大学芸術学部において後進の指導にもあたっている



ヴァイオリニストの滝千春さん。ソロ・リサイタルや国内外の主要オーケストラや小澤征爾、ユベール・スダーンら名指揮者と共演を重ね、仏Musica Nigella音楽祭をはじめ、ハンガリー、スイスなどヨーロッパ各地の音楽祭にも多数出演するなど精力的に活動を展開。2023年発売『PROKOFIEV STORY』は「ONTOMO MOOK レコード・アカデミー賞」を受賞。25年発売『Schnittke CLOWNS』も特選盤に選出される。またジャズ作曲家・挟間美帆とのプロジェクト「MaNGROVE」など、演奏活動に加えプロデューサー、アーティスティック・ディレクターとしても幅広く活躍中

私も2台ピアノの経験はあってすごくレコーディングが楽しみでした。これはひとつの領域で、アプローチの仕方や可能性が無限にあるので。

安田　藤原さんは現代音楽の、とりわけフランスのほうに軸足があって、アメリカみたいな少々緩やかな現代音楽ではなく、隙間の長さまで決められた中で表現しなきゃいけないようなシビアな世界でやってこられている。それだけで僕は尊敬しちゃってます。

滝　私は、フルコンピアノ2台にヴァイオリン1台なので、「埋もれちゃいけない、負けちゃいけない」という意識は強く持ってました。

藤原　録音の時に滝さんはちょっと離れてセッティングしてましたけど、アンサンブルも、あの距離感で合わせなきゃいけないのがスリリングで面白かったですね。ピアノは2台並べてセットして、隣を覗けば弾いてる手元が見えたんですが、見てたら遅れるから見ないで聴いて合わせる場面もあって、すごく刺激的でした。



本誌試聴室のリファレンスシステムで『HIVULA』を試聴。USB接続したPCから48kHz/32bitのファイル音源を再生し、スピーカーから音を浴びる

〈使用機器〉
- D/Aコンバーター：アキュフェーズDC-1000
- コントロールアンプ：アキュフェーズC-3900S
- パワーアンプ：アキュフェーズA-300
- スピーカー：フォステクスRS-2 with NW-3

〝現代音楽〟ってもはや死語だと思う。だから――

滝　ライナーノーツに『HIVULA』は、私が想像した、存在しない国をめぐる音楽から生まれた作品集」という一文を寄せてますよね。安田さんにとってその「存在しない国」って、どのような国なんですか？

安田　先ほど少し触れましたが、フランスはフランスでオリヴィエ・メシアンやピエール・ブーレズに代表されるシビアなかたちで進化した現代音楽があって、一方アメリカでは少しラフな、ジョン・ケージとかモートン・フェルドマンとかが広まっていった。そこから少し広く見ると、ジャズはジャズで難しいことになっていく状況は似ていたりする。どんどん細分化したり、ロックと一緒になった人もいたり。それぞれ進化していって、それぞれどこの国だかわからないといえばわからない。そこにきて滝さんが『プロコフィエフ・ストーリー』『シュニトケ・クラウンズ』という作品をリリースして、僕は衝撃を受けたんです。日本ではかつてない切り口だと。

滝　プロコフィエフもシュニトケも、資本主義と共産主義の間で、どこの国だか本当にわからないことになってるんですよね。

安田　そう。シュニトケなんかソ連では国家の敵で、生き延びるだけでも大変ですよ。シュニトケ自身は西欧の音楽の最先端に興味を持ちつつも、お国柄そういう思いは前面に出せない。なので自分の中で作り変えて出したりする。それは国籍不明なものではあるんだけど、でもソ連という国に喜ばれるところも出さなきゃいけない。そういう音楽こそ実は僕にとって魅力的で。

　それを僕がやったらおこがましいかもしれないけど、フランスのブーレズみたいにある程度行き着くところまで行ってその結果、曲のどこかに、ほんの2小節間程度だけ、どこかの国や地域を思わせる旋律や空気感が滲んだりひょっこり顔を出したり、そういうことを僕はやりたいと思っていて。日本も何も、ましてジャンルもなく。現代音楽って言葉ももはや死語だと思うし、そういうものの進化ももうあまりないような気がしててね。だから自分の思う架空の国なんて、結局どこの国だかわからない。そして、どこの国だかわからないことこそ正解だろうという、そんな思いもタイトルに込めてます。



〝音にならない音〟を捻り出すように

安田　ではここから、実際に作品を聴きながらお話をしましょうか。12分超える曲なんですが、作品の中のひとつのメインなので、「パスト・ミサ」を。

（再生）

滝　あ〜、息ができない（笑）。

藤原　滝さんの最後の1音、これはすごいですよ。本当に息できなくなっちゃう。

安田　そうですよね。ソの長い音がずっと終わりに至るまで。この曲のヴァイオリンは相当大変だっただろうな。

滝　人ごとですか（笑）。でも本当にその通りで、「ゼロから100まで使い分ける」感覚でした。〝音にならない音〟を捻り出すように、どういう雑音を出すか、どうしたら痛々しい音になるか…って。

安田　ヴァイオリンの美音を聴かせようって次元ではないからね。

滝　はい。この曲の前情報として安田さんが「これはガザ戦争だ」と仰ったんですよ。最初はヴァイオリン一人で始まりますけど、まずイメージしたのは、焼け野原。そこを子どもが一人、頭真っ白になって涙も流さずに歩いてるシーンで。その子に起こったことがあとで回想されていく感じなのかな、と。なので孤独、寂しさ、悲しささえもはや感じてないような〝無〟の状態から入ろうとした時、声にならない声をどう表現しようか考えました。中間部分の爆弾が落ちるようなシーンや、途中に入る滝さんの歌も〝人間の声〟として、グッと迫ってくる。中間部のピアノはかなり派手に弾きましたけど、今聴いたらヴァイオリンを上回ることもなく、〝渦〟のような表現ができていて嬉しかったです。2台のピアノの、楽器やタッチの違いが聞こえながら、でも一体になってる。



安田　2台のピアノとヴァイオリンが寄り添いつつも分離よく、うまくまとまった録音ですよ。それでは最後に、やっぱりこれを聴きたいですね、「スカイ・ラメント」を。この曲はこれまでにいろんなバージョンでやってきて、映画のエンディングテーマ（※詳細はP174）のバージョンもボーナストラックとして収録していますが、ここでは2台ピアノ・バージョンを聴きましょう。

（再生）

安田　う〜ん…、2台ピアノの効果が深く味わえますね。当たり前だけどピアノ1人の場合とは全然違う。

滝　これ、中間部は半ば即興的に弾いたんですよね。基音の短いメロディだけいただいて、あとは3人、それぞれ適当に弾きましょう、みたいな（笑）。

安田　今聴くとやっぱりそういうところがあってよかったな。そこまで曲に少々重さがあるけど、中間部でそれがパァッと軽やかに抜ける。

藤原　音が被らないよう気を遣いましたね。お互いの音を聴きながらあえてずらさなきゃいけないので。それにしても本当にどこにも偏ってない、どこの国でもないって感覚が伝わってきます。

滝　そうそう。どこにも属さない感じがこの作品の特徴ですね。どこと決めてもいいけど決める必要もない、みたいな。

安田　お二方は幼少の頃から正統的な音楽教育を受けてこられたでしょう？一方僕は全然違うジャンルの出身だし、この作品のような感じで演奏される方はあまりいないんじゃないかと僕は思ってたの。仮に細かく指示指定をして、その通りにやりましたと言われてもつまらないし、やってほしいニュアンスをいちいち伝えなきゃいけなくなった途端に、どっちでもよくなっちゃったりしますし。お二方は超一流のプレイヤーだからこそ、そこから大幅に飛び出しちゃっているんですね。

藤原　そんなそんな…、ありがとうございます。

滝　今度はこの3人でライヴコンサートもやりたいですね。

安田　そうですね。いいピアノが2台ある場所を探して、ぜひ実現しましょう！

次にどんな音が出てくるかわからないところも、いわゆる〝リアル〟ですよね。1秒後には自分は死んでるかもしれないというリアルな現状を音にした感覚です。

藤原　出だしの旋律のテーマは「祈り」でしたよね？すごく胸に来ました。